

第四章 友達から始まる恋人生活

「やっちゃった！ 間に合わない！」

いつものように、二度寝三度寝と繰り返してしまった。僕は馬鹿か。溜瀬とのデートがあるのに、なんで普段と同じ時間に起きてるんだよ。

今の時刻は午前十一時。待ちあわせまで残り一時間もない。

服を事前に選んでいたことと、寝癖がほとんどなかったのが幸いして、支度はすぐに終わった。

ご飯はいらないと一言添え、怖いものに追われている勢いで家から飛び出す。そこからは猛ダッシュ。

乱れた呼吸を電車に乗っている間に整えて、ようやく目的の場所——公園前に着いた。スマホを点けると、まだ十二時になっていなかった。なんとか遅れずに済んだ。ギリギリだけど。

廃れた公園のベンチで、読書タイムを満喫している少女が一人。

彼女は、紺のブレザーを羽織っており、そこから焦げ茶色のブラウスを覗かせてい

る。下もブレザーと合わせた紺のスカートだ。そして、足下には暗い色の手提げカバンが置かれている。

私服のはずだが、どことなく学生服のようで、個性を極限にまで薄めた地味な雰囲気だった。だが、瑠瀬の特徴を考えるとこの服装が最適だろう。

今の光景をイラストにすると、相当なものができあがるに違いない。そう思わせるほど素晴らしい選択だ。

もっと眺めていたいが、それではデートが始められない。

「ごめん、待った？」

「え！？ あ、ああ。別に待ってないわよ」

言う内容が男女逆に感じるけれど、別次元の美しさを見られたし、どうでもいいか。「それで……どこに行きたい？」

「んじゃあ……」

綿密に練ったデートプランを発揮しようとしたところ、空腹を示す音が鳴り響いた。情けないことに、僕のお腹からだ。

「ふふっ、まずはお昼ご飯かしら？」

口元に手を当てたまま、笑われてしまう。言葉じゃなく、体で伝えてしまうなんて。
「……うん。お腹空いたし」

恥ずかしさに耐え、昼食に誘う。

「ちなみに、さっき何読んでたの？」

脈絡のない会話になるけど、どうしても気になっていた。信頼しているからか、嫌がるそぶりをまったく見せずに答えてくれる。

「これよ」

ブックカバーの下には、きわどい服装をした爆乳の女性が数人描かれていた。彼女たちは皆、角と羽を生やしている。そして、『家畜勇者はサキュバスハーレムで眠りにつく』という文字も目に入る。

やはり、エロに趣をおいた小説を読んでいたようだ。

「それってどんな？」

やってしまった……。

「この作家先生は新人さんで、期待を込めて買ってみたんだけど、すっごく面白くてね。ちょっと調べてみたら、ネットに投稿してたみたいなんだけど……。特に、一人一

人の属性がしっかりと出ているのが良くて。誰が読んでも、絶対に好みの娘が見つかるんじゃないかってほどにね。とは言っても、イラストの力も大きいと思うけど。まあ、それは置いて、私はこの娘！ 大人の余裕たっぷりなサキュバスが好きなの！ただ、複数ヒロインのせいで、一人ワンシーンなのが残念で……。それもセックスばかりでねえ……。一応複数プレイがあるけれど、どれも内容が同じで。次回作で補完するか、ネット投稿者というところを生かして、番外編みたいなのをあげたりしてほしいなって。

でね、この作品の特徴はね、男に淫紋を刻むシーンがあるところなの！ どう、すごいでしょ！ 商業でこれを見るなんて……はあ……よかったわ」

そう、瑠瀬はこういう人だったんだ。

ほどよい感じに、会話を受け流さなければ。興味があるのは確かだけど、これ以上のめり込ませてしまうと、ご飯を食べるのが遅くなってしまう。

「タイトルだけでも良さそうだし、気になるのもわかるよ」

「やっぱりあなたもそう思う？ 実はタイトル買いしちゃって……。やっぱりタイトルって重要よね。一番初めに目にする文字だし。悪い言い方になりそうだけど、タイ

トル釣りもできるし……」

「ごめんだけど……その話は後でいい？」

「あっ！こちらこそごめんなさい。少し熱くなり過ぎたわ。もうペコペコでしょ？」

「うん。さっきまで寝てたせいで、朝ご飯食べる暇がなくて……」

「ふふっ、お寝坊さんなのね」

とうとう待ちに待ったデートが始まる！

まずは、腹ごしらえからだ。

結局、どこにでもあるMマークのお店で、昼食を取ることになった。

ネットで探したとっておきのカフェを提案したんだけどなあ。これじゃあ、リア充らしいデートにならないじゃ。

変わらない店内だが、隣に瑠瀬がいるおかげか、まったく違う雰囲気になっている。もしかしたら、普段の何倍も美味しく感じるのかな。

「あの……これとこれ……あと、これで……」

新商品セットと単品ハンバーガー、そしてナゲットを頼む。こんな注文の仕方だと、なんだか申し訳なくなるのだが、あんなに長い商品名を言えるわけない。

「一つじゃないの？」

「う、うん……お腹空いてたし」

「さすが男の人ね」

こんなところで感心されても、恥ずかしいだけだが、悪い気はしない。

「そうね……このチーズバーガーセットをお願いするわ。ジュースはオレンジで」
残すは会計だけ。ネットで得たデートマニュアルに従えば、全部出した方がいいんだよな。

「ちょっと待って。私のは自分で払うから」

「でも……」

「いいの。いいの。支払いぐらい共有しないと、幸せも共有できないでしょ」

「そう……わかった。」

店員さんから、そして背後からも、リア充爆発しろという視線を送られ、撃沈しそうになってしまう。

向かい合わせになるように座り、同じタイミングで食べ始めた。

予想通り、超がつくほどの絶品で、一人でいるときは絶対に感じられない味だった。恋人がいる効果を実感する。

瑠瀬との初の外食は、とても充実したもので、あっという間にお腹も心も満たされた。

「それじゃあさ、次カラオケ行く？ それとも映画？ 今流行りの恋愛映画あるでしょ。それ観ようかなって」

「別にいいけど……」

「どうしたの？ ボウリングとかやってみたい？」

「不快にさせたらごめんなさい。その……それって本当にしたいこと？ あなたが好きなことでいいのよ」

その言葉で、デートという行為に浮かれすぎていたことに気がついた。カラオケや恋愛映画、ボウリングなんて、僕自身まったく望んでいない。

やりたくないことを無理にやっても、楽しめないに決まっている。僕だけでなく、瑠瀬も満足できないはずだ。

ここからは、素の自分を出していこう。

「……瑠瀬はどこ行きたいところある？」

「誘ったの私なんだけど、特にないの。一緒にいたかっただけだし……」
そう言われると、どうしても照れを隠せない。

「あ、書店がいい。ちょうど新刊出てたはずだし」

「だったら、次本屋さん？」

「お願いするわ。それで、あなたはどこがいい？」

「僕は別にいいよ。というか、久々に本屋さんに行ってみたいし」

「あまり行かないのかしら？　よくラノベ買ってるみたいけど……」

「いつもプロゾンだからね」

プロゾンは、本からゲーム、食品、その他なんでも揃っているネット通販だ。検索するだけで目当てのものを探せるし、品切れもほとんどない。とにかく便利過ぎる。

「あら、そういうの使いすぎると、店の人が困るんじゃないの？　売れない、消化で

きないって……」

その通りだった。通販のおかげで、書店まで足を運ばなくてもよくなったではない。通販のせいで、書店に行く機会がなくなった。こう表現すべきだった。

「店もいいわよ。店舗特典とかいろいろあるし、独自のポップもある。何よりも、実際に本が置かれてる光景を見られるんだから。もちろん通販も良いわよ。いろんなものが、どんなときでも頼めるのが強みよね」

「次からは、できるだけお店にしようかな。……んじゃ、今から本屋さんに……えっと、どこにあるの」

「すぐ近く。こっちよ」

このあたりの書店なんて知らないんだけど。不審に思いながらも、とにかくついていくことにする。

かれこれ十分近くは歩いている。なにがすぐだよ。

髪がべっとり張り付いて、汗もたらたら垂れてくる。夏の日差しが、鬱陶しいこと

この上ない。

「大丈夫？」

「ええ、平気だけど？」

運動が苦手そうなのに、息一つ乱れていない。こんなに体力あったんだ。いや、僕が弱過ぎるだけかもしれない。うん、きっとそうだ。

「そんなこと言うってことは、休みたいの？　なんだか疲れてるみたいだし」

「……いや、まだ大丈夫だから」

「ほら、無理しないの。そのコンビニでアイスでも買いましょ」

強がりだとバレていたようで、休憩を促される。気遣いに甘えなくなってしまうが。

「いいよ、まだまだ元気だし……」

体力面で女の子に負けたくないという理由から、誘いを拒んでしまう。

「なら頑張ってね。ここを曲がればすぐだから。中は涼しいし、ここよりはマシかしら」
いかにも怪しい道を進んでいく。信頼しているから、後ろについていっているが、危険なおかしかしい。

「ここよ。私が行きたかったのは——」

本当にここであっているのだろうか。多種多様の漫画や小説、CDやDVDまで置いているところを想像していたのだけど、これではまるで……。

瑠瀬は、一切躊躇わずに入っていく。対する僕は、恥ずかしさを覚えながら入店する。

「うわあ……」

ドアをくぐってすぐ目に付く、肌色成分が多い女性のイラスト。やっぱり、成年指定の本ばかり扱っている店じゃないか。

「こういう店初めてだった？」

無言のまま首を縦に振る。

「商業の作家先生はもちろん、同人誌の販売もしてるから、見て回るのはいい経験になるんじゃない？」

「……そうなんだ」

普通の書店にはない同人誌には興味があるし、大々的に紹介されているトロ顔をした女の子の漫画にも惹かれてしまう。このイラスト見覚えがあるんだよねあ。そう思い手に取ってみると、香子^{きょうこ}先生が描いたものだった。

「それって？」

「あ！？ えっと……う、うん。前から好きで……」

エロ漫画に詳しくない僕でも読んだことがある、有名な作家先生だ。性愛をメインに、強姦ものや男性受け、ときには女性同士、それはもう多岐にわたるジャンルで活動している。同人活動もやっていて、今回のコミフェにもサークルとして参加すると呟いていたような。雑誌インタビューで子持ちの女性と知って、大変驚いた記憶がある。

「……ありがとう」

「ん？ ど、どうも……」

嬉しそうにしている理由がわからないけど、とりあえずお礼を言っておく。

「買ってみれば？ 八回目の単行本で、面白さ……実用性は私が保証するわ。DL販売は遅れるようだし」

「考えてみる」

「変なこと聞かかもしれないけど、電子の方が使いやすいの？ それとも書籍？」

「えっと……どうだろ？ 書籍が良いっていえば、嘘にはなるかもしれないんだけど……。そんなことより、もっと見て回る」

ぴったりとくっついてくるせいで、嬉しいのやら恥ずかしいのやらおかしい気持ちになつてしまう。普通だったら幸せだけど、今は出来るだけ避けてほしいんだよな。

エッチなものが置いてある店だと、客層も限られてくるわけで、そんな場にカップルでいると落ち着かない。実際、憎しみのこもった眼差しを向けられているし。それでも、瑠瀬は何も感じていないようで、エロ漫画の山に夢中になっている。

「……これよ！ これ！」

いきなり一冊の薄い本を手にとって、嬉々とした声をあげる。その様子は、砂漠の中から砂金を探し当てたかのようなだった。

「それは？」

興味が湧くのは当然で、宝物のように握りしめているものに注目する。

表紙には、頭まですっぽり覆い隠すマントを羽織った女性が描かれてた。怪しさを醸し出す服装をしているが、自己主張が激しすぎるわがままな胸のせいで、妖しさも十分すぎるほど放っている。

わずかに覗く表情は、可愛さと艶めかしさが混ぜ混ぜになったものだった。外見に釣られたら、すぐに性的に食べられてしまいそう。

そして、いやらしい涎を垂らした、先端が開いた尻尾を手前に持ってきている。あれやばい……啞え込まれたら、絶対気持ちいいやつだ。

なんかもう全体的に、私、サキュバスですって主張しまくっているイラストだった。「これはね、黒影先生の『ウチにサキュバスがやってきた』よ。前回のイベントの新刊だったんだけど、行けなかったからここまで買いに来て……」

「く……黒影先生？」

聞いたことのない名前に、疑問系で返してしまう。

「黒影先生もサキュバスもののメインで、一方的な凌辱というよりも甘めの作風かしら。それで、母性あるキャラが描けるところを尊敬していて、胸に抱かれたまま眠りたいって思わせる魅力があるの。あと、誘惑ものも得意で、我慢し続けていた心がぽっきりと折れるシーンはもう最高で……。今回の話はなんと、これは言っちゃダメだったわ。なんて表現すれば……サキュバスと同棲するリアルな感じ？ とにかく楽しみでね……」こんなことでもオタクモードになるのか。店内ということもあって、もう少し声を抑えてほしいのに。

近くの人に視線を向けると、引くどころか、興味深そうに聴き入っていた。同じ場

所に集まっている者同士、理解し合えるのかな。僕も、瑠瀬の説明に興味関心を隠されず、その本に手が伸びてしまう。

「ちょっと買ってみようかな？」

「そうした方が良いわ。ちなみに、私が一番好きなのは『お母さんサキュバスのばぶえっち』で、ここにあればいいんだけど……DL販売でもいいんじゃない？」

「う、うん……わかったよ」

その後も、グルリと探索していき……。

エロ漫画に囲まれているときの瑠瀬は、かつてないほど目が輝いていた。どうして、これほど幸せそうにしているんだろう。一体どういう理由で、エッチなコンテンツに興味を持ち始めたのか。まだわかっていないことが多い。早くすべてを知りたい。そのためにも、もっともっと一緒にいなければ。

数十分後、僕たちは満足した面持ちで店から出た。

瑠瀬は、黒影先生の新刊とその他にも数冊買っていた。レジに通すとき、恥ずかしがる様子を一切見せなかった。歪みねえよ。普通はカモフラージュしたり、店員を見ないようにするものじゃないのか。

僕はというと、瑠瀬の目当ての同人誌と香子先生の単行本を購入した。おススメされたものをすべて買おうとしたけれど、財布にかかる負担が大きすぎて諦めざるを得なかった。

そして、待ち合わせ場所だった公園に戻って来た。

太陽が照る青い空の下、エロ漫画を持った男女が仲良くベンチに座っている。相変わず、僕たちしかいない世界だった。

今だったら、あの話を聞けるんじゃない。勇気を振り絞って一言――

「あの……」

「どうしたの？　ここで読んでもいいのよ。私しかないし」

「そうじゃなくて、その……なんで同人活動をやってるのになって……。嫌だったら無理に言わなくてもいいから」

「んう……好きだから……かしら？　好きだからやっている。ただそれだけのことよ」
きわめて普通な答えに拍子抜けしてしまう。

「でね、好きになった理由は、母さんの仕事に影響されたから。初めはそういうのに慣れなくて……というか、苦手だったんだけど、母さんの話を聴いていく内に素敵って思えるようになって、自分でも描き始めることにしたの。そうして、今の私が生まれたってわけ」

「そうだったんだ。瑠瀬のお母さんも同じジャンルの人？」

スポーツという括りでも、野球やサッカー、マラソン、市民権を得ていないものまでたくさんあるように、エロにも数えきれないほどのジャンルがある。

「うーん、得意分野は性愛かしら？」

「それじゃあどうして？」

突如表情を暗くし、俯いてしまう。とっさに謝ろうとしたが、顔を上げた彼女は、覚悟を決めたような凜とした面持ちになっていて、謝罪の言葉は喉元で止まった。

「……私、子どもの頃いじめられてたの。小学生のときは、父がいないせいで仲間外れにされて、母さんがエロ漫画家だったことから、中学生になると痴女とか援交女ってからかわれて……。まったく、そんな情報どこから仕入れてきたのよ。それから、目立たないように過ごしてきて……。あのときみたいに変なこと言われたくないし」

苦い記憶をすりつぶすように語ってくれる。

こんな過去があったなんて。掘り起こさせて申し訳なくなるが、打ち明けてくれたことに感謝している。

「ごめんね……。でも、今の活動とどんな関係が？」

ただ、聞きたかったのはこういう話ではない。男性受けというジャンルで描き始めた理由だ。

「そうだったわね。これには続きがあるの。どうしても彼らに仕返ししたくなつて……。我慢できないほど憎たらしくなつてたの。とはいっても、そういうことをしたら問題が大きくなるだけだし、返り討ちにあうのもわかつてる。下手をしたら、もっと酷いいじめを受けることにもなる。そこで考えたの。物語の中で絶対に負けないキャラを演じて、みんなをいじめてやろうって。母さんの影響でエロ漫画を読み漁ってたときに、サキュバスの存在を知ったの。どれも、男がサキュバスに負ける話ばかり。それを読むとすごいスカッとして……。その強さに惚れて……。そこで思ったの。サキュバスを演じれば、私をいじめてた人たちなんて一瞬で墮とせるって。それで、恨みを晴らすために描いてたら、止まらなくなつて……。それから、母さんに勧められるまま同

人活動を始めてみたの。ねえ？ 引いた？ 仕返し目的と知って幻滅した？」

いじめでストレスが貯まるのは当然だし、発散しなければ生きていけない。瑠瀬にとつての発散方法が、自己投影できる創作活動だっただけ。

「幻滅なんてするわけない！ 実は、僕もその……書いてた小説が見つかって、馬鹿にされた経験があるんだ。特におかしくないはずだね。瑠瀬だって創作してるし。それなのに、僕だけがおかしな人扱いされて……。それに、持ってたライトノベルを取り上げられて、『変なの』とか『気持ち悪い』って貶されて、それが頭に来て刃向かったらボコボコにされて……。そんなことでムキになるなんてまで言われて……。そんなことだよ、そんなこと……。うう……。何も間違つてないはずだね。実際に読んだ具体的な理由を付けて面白くなかったのならまだ許せるけど、まったく知らないのに一方的に馬鹿にするなんて、絶対おかしいって……。

それで、みんなと同じことをしないといじめられるって気づいて、周りに合わせようって……。勝手な行動をしないでみんなの顔色うかがって過ごそうって……。あ、ごめん。愚痴みたいになって……」

好印象与えるために被っていた仮面は、周りとズレた人になりたくない。そうなっ

たら、またいじめられてしまうから。そこから生まれたものだ。

みんなと違う存在を排斥しようとする思想の餌食にされ続けた過去がある。

今度こそ仲間になろうとしたのに、結局なれなくて……。

刃物で胸を貫かれたような気分になる。心がひしゃげて、感情が壊れてしまいそう。もう、まともに思考すらできない。

僕の容態を察してくれたのか、慈愛に満ちた言葉で慰めてくれる。

「世間から気持ち悪がられる物を創っていたとしても、それを貶す方が気持ち悪い。情熱を持って取り組んでいる人を馬鹿にすることは、最低の行為なの。まあ、これは母さんが言ってくれたことなんだけど。だからね、あなたは何も悪くない。小説を書いていたのは、とってもいいことだし、好きな作家先生を馬鹿にされて刃向かったのは素晴らしいことだと思うわ。あと、周りと違うからって、やりたいことに嘘をついちゃダメ。枠から外れても、自分が望んだことをしなさいって太田先生も行ってたでしょ」ギュッと抱きしめてくれた。初めての抱擁——それは感動的で愛情がこもったものだった。

瑠瀬の温かい声と体、彼女の母とまさかの太田先生のおかげで、完全とはいかない

までも、トラウマを克服できた気がする。

「ありがとう……」

涙腺が緩み、次々と涙が溢れてくる。悲しさや辛さからじゃない。それは、僕自身が一番よく理解している。

落ち着くまで、ずっとその優しさに包まれていた。その間、冷たくなった背中をさすりながら、黙って見守ってくれていた。

どれぐらいの時間が経ったのだろうか。涙交じりのままもう一度感謝を伝えて、抱擁を解いてもらう。

「瑠瀬のお母さんって、ほんとすごい人なんだね。僕もお世話になっちゃたよ」

いずれは会う予定の瑠瀬の母。彼女には、感謝しても仕切れない。

シングルマザーとして、ずっと子育てをしてきたらしい。瑠瀬が受けたいじめにも真摯に向き合っていて……母の鑑といえる存在だったんだな。

それとは別に、恋愛をメインに描いている作家先生で、サキユの宮さんの活動に大きな影響を与えているそうで……。

ん？ ひょっとして——！

「もしかして、瑠瀬のお母さんって香子先生？」

「あれ？ 言ってなかったかしら？ そういえばまだだったわね。咲ノ宮香子、母さんでもあり、尊敬してる作家先生なの」

「やっぱり……」

さっきしてくれた話と、香子先生が明かしている情報がどことなく似ていると思ったら、本当にそうだったのか。

「これは会うとき緊張しちゃうなあ……」

瑠瀬の母というだけでも体が強ばるのに、それがエロ漫画の最前線で活躍している香子先生だとわかると、よけいに硬くなってしまう。

「大丈夫よ。怖い人じゃないし。それに、コミフェですぐ会うことになるんだから、そう緊張しなくてもいいじゃない」

「いやあ……コミフェ行こうか悩んでるんだけど……」

魅力を感じているのは確かだが、勇気を出せずまだ一度も行けてない。幸いなことに、DL販売でほしいものは買えているけれども。

「ん？ これもまだだったわね。あなたに売り子をやってほしいの。書いたものを出

すんだし、ちようどいいでしょ？　それで、母さんもコミフェに参加するし、そのと
きに顔合わせられるかなって……」

「僕が売り子！？」

「やっぱりダメ？　無理ってはっきり断ってくれば別の人探すけど」

「ううん……」

正直なところ、務まるのか心配だ。だが、これも溜瀬を知れる良い機会じゃないだろ
うか。どういう気持ちで同人活動に向き合っているのか、傍にいたらよくわかるはず。

「やる！　やってみたい！」

「ありがと。……あ、あのとき、復讐のために描き始めたって言ったけど、今はそん
なことないから。最初に言った通り、好きだから描いてるの。描いてるときはとても
楽しくて……それに、みんなから感想もらえるのも嬉しくて……。そうそう、子ども
の頃に書いた小説ってどんなの？　見せてもらえることってできるかしら？」

「うっ——それはちょっと……」

内容が内容のせいで、むず痒くなる。あまり思い出したくない。

「見せられないようなものってこと？」

「恥ずかしくて……」

「初めの方は、未熟なところもあるから仕方ないわよ。まあ、初期の作品のおかげで、新作が出来ているのは確かなんだけど。それで、次どこ行く？」

話し過ぎていたせいで、デートをしていたことをすっかり忘れていた。

よくよく考えたら、ご飯食べてエロ漫画買って、過去を打ち明けただけじゃないか。こんなの、理想としていたデートじゃない。それでも、かつてないほど満たされていくから大丈夫だ、問題ない。

「今日はもうこれぐらいでいいかな。また今度、時間があつたときできる？」

「またしたいけど、あなたも私もやることがあるでしょ」

僕は小説を仕上げなければならないし、瑠瀬はサークル主催者としての仕事がたくさんある。それが一段落するまで、デートは難しいだろう。

「わかってるって、絶対間に合わせてみせるから」

「お願いね。それから、母さんも黒影先生も喜ぶだろうから、しっかり感想書いてあげるのよ。私もこれ読むのが、楽しみで楽しみで……」

以前も言っていた、感想の呟きを促してきた。それは既に理解している。

それよりも、最後の言葉のせいで、瑠瀬がエロ漫画を読んでいる姿を想像してしまっ
て……。読んでいるときは、一体どういう気持ちなんだろう。どんな感じで乱れてい
るのかな。いけない妄想が、次々浮かび上がってくる。

「何してるの？ 早く帰るわよ」

この考えがバレずに済んで助かった。バレていたら、いつものSモードで責められ
ていたに違いない。それもそれで辛せだけど。

僕たちしかない公園を出て、駅を目指して歩き始める。着くと同時に電車がやっ
てきた。

一旦の別れ。明日また学校で会えるし、ツブヤイターでいつでも話せる。電話だっ
てできる。寂しくない。

夏休みに入り、数週間が経った――

小説を書き切った段階で終わりじゃない。瑠瀬がイラストを描かなければ、完成品にならない。文字と絵、それが合わさって作品となるのだ。

そのことを理解している僕は、全力で執筆活動に取り組んでいた。ずっとパソコンに向かって、疲れたらベッドで睡眠。目が醒めたら、またキーボードを打っていく。これを何日も繰り返し返して……。

「終わった……」

長く苦しい戦いを迎えたときのような、達成感に包まれた言葉を吐き出した。

指定された文字数になるように調整し、何度も推敲を重ねてきた。自分で使えるかどうかを試してみた。これで本当に終わったはず。

原稿を納めようと、メールを作成していく。

送信ボタンを押すときの緊張は、ここ最近で一番だったかもしれない。

気づいてもらうまでに時間がかかるだろうし、ツブヤイターに連絡を入れておこうかな。いや、電話でいいか。依頼主であると同時に、恋人でもあるのだから。ちょうど、瑠瀬の声を聴きたいと思っていたところだし。

日が変わる直前といってもいいぐらいの時刻だけど、少し前にコミフェ告知の呟きをしていたし、まだ起きているはずだ。

家族以外に電話をかける。初めはぎこちなかったこの動作も、もうすっかり慣れてしまった。恋人との会話は、それほど日常に溶け込んでいる。

しばらくすると、聴きたかったあの声がスマホから流れ出す。

『こんな時間にどうしたの？ 何かあった？ 話ぐらいなら聴くけど……』

深夜の電話にも苛立ちを見せず、こんな時間だからこそ何かあったのではと心配してくれた。優しさが滲んでいて、ついついうつとりしてしまう。

「瑠瀬の声を聴きたくてね」

大切なことがあるというのに、心の声が漏れてしまった。すかさず、本題に切り替えていく。

「頼まれてたものあるでしょ。さっき送ったんだ。それを知らせて……」

『あら、早かったのね。ありがとう、しっかり完成させてくれて。今から読ませてもらうわ』

「……おやすみ」

『もういいの？ それじゃ、おやすみなさい』

包まれるようなおやすみで、電話が途絶える。

おやすみという言葉通り、布団にもぐって眠ることにした。

目が醒めると、一通のメッセージが届いていた。特定の箇所を直してほしいらしい。いかなければ、リテイクだ。

終わったと思っていたばかりに悔しくなるが、完成度を高めるためにこの作業は欠かせない。作品の質が良いほど、当然評価も上がる。

溜瀨の言う通り、もっと細かく表現できる場面がいくつもあった。それに、わずかな誤字脱字も。

数日かけて、リテイクに励む。そして、今度こそという願いを込めて、再度納品する。結果は合格——サキユの宮さんに認められ、初の仕事は成功に終わった。

それだけで大きな達成感を得られたが、コミフェ当日に仕事分のお金もいただける。後は、完成を待つだけ。

コミフェ前々日、ツブヤイターにダイレクトメッセージが一件。完成品を送ったとの連絡だった。

覚悟を決めて、協同作品を読み始める。

「うわぁ……これ、スゴッ——！」

表紙の時点で目を輝かせてしまう。とてもエッチなイラストで、それだけで身体が満足するほどだった。挿絵も素晴らしいの一言。

だが——作品が完成して嬉しいはずなのに、どうしようもなく不安になる。

サキユの宮さんのイラストと僕の文章は、釣り合うのか。僕のせいで、クオリティを下げてしまわないだろうか。そして、お金を出すのに値するものなのか。黒い感情が離れなくなる。

いよいよコミフェ当日。

前回の反省を踏まえ、無事待ち合わせの二十分前に着くことができた。緊張や恐怖でなかなか眠れず、早めに起きてしまったのだ。

じっと佇んでいると、初デートと同じ服装をした瑠瀬が駆け寄ってくる。

「ごめん、待たせちゃった？」

「ううん、大丈夫だよ」

瑠瀬のためなら、何時間、何日でも我慢できる。数十分程度なら待ったに入らない。このまま会場に向かいたいところだが、どうしても気になることが一つ。彼女の少し後ろに、見慣れない女性が立っているのだ。

瑠瀬とは正反対の巨乳で、大人の魅力を放っている。薄着ということもあって、余計にいやらしい。

忙しいのかオシャレに興味がないのか、髪が長くバサバサしている。それはそれで色っぽい。

メガネをかけていないが、顔立ちが瑠瀬に似ていて……。

おそろおそろ、質問を投げかけてみる。

「あ、あの……香子先生ですか？」

「ん、そうだが」

やはり、この人があの香子先生で、瑠瀬のお母さんなのか。

「僕は……」

自己紹介をしようとするが、遮られてしまう。

「瑠瀬から聞いてるから平気だ。彼氏なんだろ」

「か、彼氏!？」

「違ったか。あんなことしたいとか、瑠瀬のこと考えながらいろいろしてるんだろ」

「そ、それは……えっと……」

恋人の母にこんな話をされれば、うろたえるのは当然だ。ここで「そうです」なんて言ったら、どうなるかわからない。そもそも、目の前に本人がいるわけだし。

「もう……母さんったら。すぐにそうやってからかう」

「ははっ、すまん。ちょっとやってみただけだ」

母の暴走を娘が止めてくれた。これで助かつ——

「あんなことしたいじゃなくて、されたいって思ってるんでしょ。私にいろいろされてみたい。そうでしょ？」

「うッ——あ、いや……」

この家族怖い。とことんいじめてくる。

「無理して答えなくてもいいわよ。それよりも……これ、わたししておくわね。今までありがと」

封筒を手渡される。中身を瞬時に理解した僕は、授与されるときのような姿勢で受け取った。

「こちらこそ、ありがとう。貴重な体験になったよ」

紙幣数枚の重さとは信じられない。お金としての価値だけでなく、作品制作にかけた努力や時間、瑠瀬の多大な感謝も感じられる。

「やることも終わったし、さっそく行きましょうか」

「そうだね」

「……ほら、母さんもこっち来て」

「朝から元気だなあ……あたしは眠くて、ふあああ……」

こうして、僕と瑠瀬、そして香子先生の三人で、コミフェ会場に向かうことにした。三人以上になると急に話せなくなるぼっち体質のせいで、声をかけられたときぐら

いしか会話に入らず、基本的に彼女たちの話を聴くだけになっている。

距離感でわかるが、この親子は本当に仲が良いようだ。今の年齢だと、家族と不仲な場合が多いだろうに。どうすれば、それほどの関係が築けるのか。それは、瑠瀬の過去話から、余裕で想像がつく。

電車を使って、人混みに流されて……ようやく目的地にたどり着いた。

写真で何度も見たことがあるとはいえ、実際に目にしてみると、とんでもない光景だった。人が津波のようになって、一つの場所を目指している。

当然のごとく圧倒されてしまうが、置いてけぼりを食らいたくないなので、意志を強く持って後ろをついていく。

とうとう会場内に——あの三角のところにするものと勘違いしていた。

香子先生といったん別れて、二人で設営を開始する。新刊と既刊を並べていく。もちろん、あの小説も。

「これが……」

「印刷屋さんの力ってすごいでしょ。すっかり小説になってるんだから。そういえば、私が送ったの読んでくれた？」

「うん……」

「なんだか元氣ないわね？　緊張してる？」

「そんなことないと思うけど……瑠瀬はいつもこんな調子でやってるの？」

どうして不安にならないんだろう。いつにもましてエネルギッシュだし。

その質問に口を閉ざして、胸の前で小さくバツを作っている。答えたくないってことなのかな。いや、これはあれだな。

「サキュの宮さんは、なんでそんなに楽しそうなの？」

今の彼女は、恋人の咲ノ宮瑠瀬ではない。同人サークル『サキュバスパレス』のサキュの宮さんだ。僕も、初芽七草という自覚を持たなければ。

「たしかに初めは怖かったけど、みんなの顔を見てると自然と楽しくなってきたね」
「顔？」

「そう。みんなの顔が好き。満面の笑みだったり、照れてたり、帰ったら早速使うぞっていう顔もあったり……。いろいろな人がいるけれど、幸せそうにしているのには変

わりはない。それに、『楽しみにしてました』『応援します』って直接言われるときもあって……。だから、早くみんなと好きを共有したいの。この考えわかってくれるかしら？」

「僕……僕は……」

小説の感想をもらったときは嬉しかったし、サキユの宮さんの話は理解できる。でも――

「その……すごく恥ずかしくて……出来も不安だし……本当にこれでいいのか心配で……」

「七草さ……あなたはこれを書くときに、手を抜きまくったの？ お金をもらえればいいとだけ思って、雑に仕上げて……。みんなに見せられないような出来だから、頒布するのが不安。こんなのを作った自分が恥ずかしい。そういうこと？」

かつてないほど努力したのに、どうしてこんなに馬鹿にされるんだ。

「違う！ そんな風にやってない！ 必死になって書いてんだ！ 一生懸命やってる人を貶すのは、最低だって言ってたくせに……なんで……」

声を荒げながら、この作品に向けてきた想いをぶつける。

「ごめんなさい、あなたの気持ちを確かめたかっただけなの。あなたは頑張ってきた、それは私が一番良くわかってるわ。文章から頑張りが伝わってきたし、リメイク出したら、格段に良くなって返ってきたもの。手を抜いてたら、ここまでできないでしょ。だから——自信を持ちなさい。自分の作品は面白い、みんなに使ってもらえるはず、良い結果になるに違いない。んう、頒布するんだから……絶対完売できる、もう売れる気しかないって感じかしら。一生懸命やったって自覚があるんだったら、自信を持てるはずよ。そうしたら、恥ずかしさも不安も吹っ飛んじゃうから」

「……でも、おかしい、気持ち悪い趣味って思われて、前みたいにいじめられたら……。お金を出すんじゃないかって……」

「もう、そんな心配しなくていいのに。作品を見下す人なんて、ここにはいないわ。同人は好きなことをするための場所で、趣味をさらけ出すところ。内容が合わなかったら離れて、好きな人同士でとことん楽しむの。同じ趣味の人ばかりになるんだし、あなたのことも理解してくれるはずよ」

その言葉に強く頷いた。サキュの宮さんの話で目が醒めた。

自信を持てばいいだけだったんだ。自信があれば、負の感情が生まれることもない。

そして、この場には僕をからかう人なんて誰一人いない。みんなと好きを共有すればよかっただけだ。

「ありがとう、サキユの……いや、ありがとう、溜瀬」

「わかってくれて何よりだわ」

中断させてしまった作業を再開し、ようやく準備が整った。サキユの宮さんも、設営完了と呟いたらしい。

とうとうコミフェが始まった。同時に、大群が押し寄せてくる。それに驚きと感動を覚えてしまう。とは言っても、僕たちのスペースに来る参加者は、そこまで多くない。数十分たっても、両手で数えられるほどだ。列ができることはないだろう。

それをわかっているのか、こう声をかけてきた。

「挨拶回りしてほしい作品があるから席外していい？」

「え、ああ……わかった」

「ありがとう。なるべく早く戻るから」

サキユの宮さんが去って数分後、好きを共有する人がまた現れた。

メガネをかけた細身のイケメンで、ステレオタイプなオタクとは対照的だった。厳

しそうなその顔には、見覚えがあつて……。

「せ、先生!？」

ここは右も左も先生だらけだが、作家先生という意味ではない。彼は、僕の学校の教師——太田先生だった。

「おや、誰かと思えば……サキュの宮氏に無理矢理売り子をやらされてるのか？」

「……いえ、違いますけど」

サキュの宮さんに逆うことができない。弱みを握られている——そんなことはない。自分の意志でここにいる。

あれ？ さっき、サキュの宮氏って？　なんで先生が瑠瀬の同人活動を？

「まあいい。新刊両方ともお願いする」

訝しみながら、サキュの宮さんの新刊と協同作品を一部ずつわたす。

僕の小説が読まれると思うと恥ずかしく……いや、自信があるから恥ずかしくない。「あと、これ——サキュの宮氏にわたしておいてくれ。今は席を空けてるんだろ」

やっぱりサキュの宮氏と呼んでいる。どうしてバレているんだろう？　これってま
ずいんじゃないのか。

わたされた紙袋を手取る。そこには、大きく『細川フトオ』と書かれていた。

「細川さん！？」

「なんだ急に？」

意外な文字に、ついつい叫んでしまう。いつも感想をくれる大切な読者でもあり、友達でもある細川さんの名前がどうして……。もしかして、太田先生が細川さんなのは？ そう信じて、すぐさま自己紹介をする。

「僕です、僕。あ、えーと、初芽七草です」

「ほお……。それは……。私が細川フトオだ」

予想は間違っていたかった。中の人に絶句する。

「いつも楽しみにしてるから、これから頑張れよ」

「あ……。ありがとうございます！」

直接応援の言葉をいただけた。たった一言が、こんなにも嬉しいものだったとは。サキュの宮さんの言った通りだ。

「この小説、僕が一生懸命書いたもので……。その……。帰ったらぜひ読んでください」
自信作を勧めていく。相手は細川さんだ。気に入るに違いない。

「そうらしいな。サキユの宮氏の眩きでそれは知っていた。七草氏も宣伝すればよかったんじゃないか」

「あ、あはは……忘れてました」

なんでしなかったんだろう。情報発信ツールをもっと有効に使えばよかったなあ。サキユの宮さんは何度も宣伝していて、その眩きは僕も目にすることがあるというのに。「もちろん読ませてもらうし、感想も伝える予定だ。……っと、あまり長居すると迷惑になるだろうし、またネットで会おう」

「ありがとうございます！」

細川さんは、この活動を非難せずに応援してくれた。いまさらだけど、本当に教師だったんだな。

彼が去った後も、数人の参加者が、幸せそうな表情をしながら僕たちの作品を手にとってくれた。細川さんのように、ありがたい言葉をかけてくれる人までいた。こういうことを経験すれば、この場が好きになって当然だ。サキユの宮さんの気持ち、十二分に理解できる。

しばらくすると、とびきりの笑顔をした彼女が帰ってきた。

「一人で任せちゃってごめんね」

「嫌なんて思っていないから大丈夫だよ」

「それならありがたいわ。で、何か困ったことあった？」

「太田先生が来て焦ったけど、実は細川さんで……僕を応援してくれて……。そうそう、これをサキュの宮さんにとって」

一番印象に残ったことを拙い語彙で説明しながら、彼からいただいた紙袋をわたす。

「細川さん来てくれたんだ。それに差し入れまで……お礼言っておかないと」

「サキュの宮さんのこと知ってたけど、何があったの？」

「ネットで知り合って、ここで出会っただけよ。中の人には驚いたけど」

僕の周りには、趣味を同じくする人が多いんだな。年齢や性別は違ってても、好きが一緒なら、気持ちを通じあうこともわかった。

「七草さんも行ってきていいわよ。手元にお金あるでしょ。ここは私がやっておくから」

「ありがとう」

サキュの宮さんにこの場を任せて、サークルスペースを離れる。

初めての仕事で得たお金と、応援している作家先生の作品を交換していく。そのときに、感謝の言葉も添える。作り手と交流ができる貴重な機会だった。

それから数時間が経ち、撤収のときを迎えた――

「ちょっと残っちゃったわね」

新刊を七十部、協同作品を三十部用意していたが、どちらも少しばかり残ってしまった。既刊は無事完売した。

「二部、七草さんが持っていてちょうだい。あとは私が保管しておくから」

「そんなの悪いよ。というか、なんで二つ」

「使用用と保管用ってことで。それに、これは七草さんが書いたものなんだし、持っておくべきでしょ」

「言われてみれば……それ二つだけもらおうかな。他のはこれでいい？」

自信作は受け取り、新刊はお金と交換した。

「ありがと。それと、もう一ついい？」

「なに？」

「これにサインしてもらえないかしら？」

初めての会話が脳裏に浮かぶ。あのときは断ってしまったけれど、今ならできる。「わかった。ちょっと待ってて……」

どこもない動きながらも、自分の小説に名前を記していく。

「……はい、どうぞ」

「大切にするね。私のも大事にしてる？」

「うん。あれを見ると、友達になったときを思い出して……。でも、もっとほしいから、これにサインしてもらってもいい？」

「もちろんいいわよ」

僕と違って、慣れた様子で新刊にサインしていく。

「ありがとう」

「どういたしまして。それじゃあ、撤収作業始めるわよ」

この作業も、終わりが近づいてくると……。

「おーい！ サキュ、調子はどうだ？」

香子先生がやってきた。

親しい作家先生だからこそできる、『サキュ』という呼び方が羨ましく感じる。僕は

まだ通称では呼べず、『サキユの宮さん』なのに。

「うん、もうすぐ終わるから。……あ、でも、黒影先生と打ち上げがあるから、一緒には帰れなそう」

「今回もか。なるべく早く帰って来いよ」

サークル同士での打ち上げて、本当にあるんだなあ。

黒影先生ってどこかで聞いたような……ああ、あのときの。初めてのデートで訪れた書店と、そこで買った同人誌を思い出す。サキユの宮さんが絶賛していたこともあって、それはもうめっちゃシコだった。

「七草さんもうどう？」

「僕！？ 僕は……遠慮しとく」

ネットのつながりがなく、どんな人かわからないし、相手も迷惑しそうだし。

「無理に付き合わせちゃ悪いものね。七草さんのこと伝えておくから」

「う、うん……お願い」

「今日は最高に楽しかったわ。ありがとう」

サキユの宮さんが去っていく。心に響く感謝の言葉を残して――

「よし！ んじゃあ帰るか」

「あの……香子先生は打ち上げ行かないんですか？」

「ん？ あたしは体力的に無理。締め切りギリギリで徹夜してたせいで、もう眠くて眠くて……」

仕事で徹夜して、一睡もしないままコミフェに……作家先生の凄絶な過ごし方を垣間見た気がする。

「お疲れさまです。香子先生の単行本書きました。その……使えました」

「サンキュ。あたしもサキュからもらった小説読ませてもらったぞ。いいもん書いてんじゃねえか。二人の息もびったりだし」

「ありがとうございます！」

みんなから絶大なパワーをもらったおかげで、出会ったときの気まずさは解消されていた。素直な感想も伝えられて満足だ。

「どうだ？ 一緒に帰るか？」

「お願いします」

そして、幸せな夢を見せてくれた会場を後にする。

「それで、どう思ってる？」

しばらく歩いてみると、いきなり話を振ってきた。

「えっと……香子先生はすごいなって……」

「すまん。あたしじゃなくて、瑠瀬のことだ」

さっきの質問は、サキユの宮さんのことだったのか。それ以前に、もうコミフェは終わってたんだ。現に、瑠瀬と呼んでいるし。いつまでも先生呼びでいいのかな。

「その前に、これからは香子さんと呼んでもいいですか？」

「好きにしていぞ」

「それで……瑠瀬、さんは……」

「あたしの前だからって無理に慣れない感じにしなくてもいい」

「は、はい。えっと……周りとは比べたら地味だけど、それでもとても可愛いし……。オタクモードの瑠瀬も気に入って……。あの話をずっと聴いておきたいなって。その……あの……瑠瀬の全部が好きで……」

「あんまりこんなこと言いたくないけど、変とか気持ち悪いって思っていないか？」

「同人活動のことですか？」

「ああ」

「思いません！ 同い年なのに、もうしたいことを見つけてるんですよ。それって、すごいことじゃないですか。あと、イベントのときすごく楽しそうにしてて、自分がやっていることに誇りを持っていて……。瑠瀬に励まされて、僕も頑張ろうって決めたんです」

「よくわかった。瑠瀬のこと大事にしてくれてるんだな。助かるよ。せっかく男作っても、すぐフられたらどうしようもないからさ。あたしのときみたいに……」

確か、お腹に子を宿しているときに離婚したんだっけ。

「その……出産前に別れたと聞いたんですが……何があったんですか？」

「瑠瀬には話したんだが……。この仕事を秘密にしたまま結婚したんだけど、ある日それがバレちまって……。そしたら、気持ち悪いって愛想尽かされただけさ」

「……その……大変でしたね」

「ほんとだよ、もう。だから、瑠瀬にはいい男を選んでほしくて……。好きなことを肯

定してくれる、すべてを理解してくれる男をな。——あんななら任せられそうだ」

「ありがとうございます！」

認められた。それはつまり、つき合っても——否、それ以上のことをしても良いということ。

「ってことで、これから頼んだぞ。瑠瀬も一緒にいることを望んでるみたいだし」

「はい！」

将来の展望が開かれる。瑠瀬と過ごし続ける未来が見えてくる。

いつかは親に相談しないといけないのはわかっていし、これから先どんなことが起こるかわからない。問題も、山のように積みあがるだろう。

それでも、二人ならどんなことだって乗り越えられるはずだ。

香子さんとも別れ、家まで帰ってきた。

かつてないほどに心が満たされている。その気持ちに顔に現れていたらしく、何かあったのか聞かれたほどだ。瑠瀬を連れてくるときまでは、黙ったままにしておきた

い。

部屋に戻って、戦利品と呼ばれるものを取り出す。

そうして、慣れた動きでツブライターを起動する。

香子先生が、僕のアカウントをフォローしてくれていた。それに、黒影先生まで。打ち上げをしている瑠瀬が、教えたのだろう。

あと、シエスタというアカウントにもフォローされていた。このアイコンって！薄い本を手にして確認する。やっぱり、瑠瀬に勧められた『ウチにサキュバスがやってきた』の表紙絵だ。自己紹介文に、黒影さんのサキュバスですと書かれているし、黒影先生のボットなのだろうか。それにしては、生活感のある眩きだけど。

これも縁だ。全員にフォローを返していく。

そうして、夜も更けていき——寝る前に愉しんでおこうかな。準備を整えた直後、スマホが軽快な音楽を奏で始める。最近になって頻繁に耳にする着信音だ。もちろん、誰からかわかっている。

『今暇かしら？』

「うん、特にやることもなかったし」

『ほんと？ さっそく使おうとしてたんじゃ……もうこんな時間だし』

「い、いやあ……瑠瀬が一番だから大丈夫だって」

『そういつてくれると嬉しいわ。それで、帰りに母さんと話したんでしょ？』

「うん……」

瑠瀬の母が、僕を認めてくれたことを伝えるべきなのかな。

『どんな話かは教えてもらったから、聞かなくてもわかるわ』

「知ってたの!？」

『ええ。でも……ご家族さんへの挨拶はもっと後にしたいの』

「それって……」

『前も言っただけど、そういうことはまだ早い気がする……』

まだ早い。その考えは十分理解できる。だからこそ、その言葉に抗うことができない……でも、少しぐらいはしてみたい。それが男の性ってものだ。

「キ、キスもダメ？」

『楽しみは最後まで取っておく人かしら？ もしそうだったら、そのときにしましょ……私も我慢しておくから……』

後半になるとボソボソ声に変わり、何を言っているのかわからなかったが、どうやらお預けらしい。

ショートケーキは、最後までイチゴを取っておく派だ。初めてのキスだって、あのときにするのが一番気持ちいいはず。

「……わかった」

『それで……これから恋人らしいことをたくさんしたいの』

「恋人らしい？」

『えっとね、プールや夏祭りに行ったり、ハロウィン、クリスマスも一緒に過ごして……あと、初詣にも行って……。それからそれから、前みたいに新刊買いに行って……。もちろん次のコミフェも行くわよ。まだまだしたいことたくさんあって……。』

次から次へと、二人で過ごす予定が語られる。その光景を思い浮かべるだけで、胸の奥から温かいものが生まれてくる。

「すっごく楽しそう！ そうだ！ 明日か明後日、プール行こうよ！」

さっそく誘ってみる。溜瀬の水着姿も見てみたいし。

私服が地味だったこともあって、派手な水着は着ないはずだ。もしかして、至高のス

ク水という可能性が！ 紺に輝く繊維が、ぴったりと肌に張り付いている様子は、暴力に等しいほどの魅力がある。

控えめな膨らみが形成されて、お椀が二つ付いているような感じになるに違いない。そして、太陽に照らされてまぶしい光を放つ太股、三角に整ったラインも目に入ってきて……。

裸体よりも遙かに情欲を誘う、スク水姿。それを想像すると、瞬く間に脳内がピンク一色に染まってしまう。

『じゃあ、明後日行きましょ。時間とかはまた明日考えるから。……それと、さっき私の水着姿想像してなかった？』

「いやあ、そんなことは……」

『別にごまかさなくてもいいのよ。正直に言った方がいいんじゃない？』

なに考えてるのよ、この変態！ こんなテンプレヒロインの反応にならないのは、男の本能——性欲を理解している瑠瀬らしい。

「す、スク水……」

誤魔化せないと悟った僕は、いつにもまして小さな声でそう口にした。

「スク水好きなのは知ってるから、特に驚かないわ。ただね、望むようなものにはならないと思うわよ。その……胸ちっちゃいし……」

胸の大きさにコンプレックスを抱いているのか、照れながら話しかけてくる。その可愛さに、一発でノックアウトされる。

たしかに、スク水は爆乳少女が着るべきもの。でも、それは二次元のエッチなコンテンツに限ってだ。

「そんなの関係ないって。現実と創作の違いぐらいわかるし。僕はただ、瑠瀬の水着姿が見てみたいだけで……あ、ごめん」

つつい本音が漏れてしまう。それに気づくと同時に、謝罪の言葉が勝手に出ていた。

『別に謝らなくてもいいのよ。……そこまで言われたら、着てみようかしら？』
「え!？」

『当日まで楽しみにしておきなさい』

これからたくさんするデートの一つとして、明後日プールに行くことになった。性欲旺盛な思春期男子らしく、恋人の水着姿に胸と股間が膨らむ。

『そうそう、近い内に例の小説も販売されるわよ。どんな評価になるのかしらね？』
「うう……自信があるとはいえ、ちょっと不安……」

『大丈夫だって。私が保証するわ』

「ありがとう。それで、その……これからも溜瀬……サキユの宮さんの力を借りるかも知れないけど、そのときはよろしく」

『こちらこそ。新作楽しみにしてるわね』

「早く投稿できるように頑張るよ。……おやすみ」

『おやすみなさい』

後日、約束通りプールに行った。本当にスクール水着でやってきて、その可愛さと艶めかしさが、脳天を直撃した。市民プールではスク水を着ないこともあって、恥ずかしそうに振舞っていた。そのせいで、エロさが増してしまい……。

夏祭りでは、溜瀬の浴衣姿を拝むことになった。その姿がまた最高で、脳味噌がとろけてしまうほどだった。そこで、金魚すくいや射的をしたり、チョコバナナを食べ

る様子に性欲を刺激されたり……。もちろん、夏祭りの目玉、花火だって一緒に観た。サキユの宮さんの新作は、今まで以上にエッチなもので、夜のローテーションがまた一つ増えた。

協同作品も発売された。売り上げも評価も上々で、レビューで文章が褒められていたときは、ガッツポーズを取ってしまった。当然のように、細川さんから感想をいたした。

新たな小説を投稿するときに、サキユの宮さんに挿絵を描いてもらった。恋人だとしても、お仕事を頼むのだから、お金を支払うのは当たり前。その小説は、またもや高い順位を叩き出した。これで、僕の知名度も少しは上がったのだろうか。

冬休みに入ると、僕——初芽七草とサキユの宮さん、香子先生、細川さんとでオフ会を開いた。趣味話のはずか、瑠瀬との将来の話になってしまい、彼に僕たちの気持ち正直に伝えることにした。教師という立場から、渋い顔をすると思ったけれど、卒業後が楽しみだなと笑顔で答えてくれた。

それから、黒影先生とも会うことができた。眩きでなんとなくわかっていたが、男性の作家先生だったようだ。彼の隣にいた、爆乳の女性がすごく印象に残っている。サ

キュバスみたいなオーラを放っていて、弱い精神が犯され魅了されかけた。それからしばらく、瑠瀬がSモードを解除してくれなくて恐ろしかったんだよなあ。

その後も、クリスマスと一緒に過ごして、初詣も二人で行って……。
エッチなことはまだお預けにされたままだけど、気にならないほど充実した生活だった。

それに、いつか——来るべきときに、心も体も繋がる予定だ。そのときまでは、今の恋人生活を続けておこう。